基づき，施設の違いなどの環境要因を考慮し，保育者の「気になる」という理解・判断に影響する要因について検討する。「気になる」ととらえている保育者の「気になる」行動の評定と，保育に対する考え方や保育観，「気になる」子どもの個体要因との関連からこれらを明らかにする。

**〔方法〕** 札幌市内に開設されている市立・私立の幼稚園・私立認可保育所に在籍している保育者を研究協力者とした。施設への訪問または郵送にて調査用紙を配布し，回収された360名のデータを分析対象とした。研究協力者が現在担当しているクラスの中で，参加者が保育・指導が難しいと感じる子どもを1名挙げてもらい回答してもらった。

**〔結果〕** 研究協力者の平均経験年数や教育歴などの属性は，市立・私立幼稚園・私立認可保育所といった施設ごとに異なっていた。「気になる」行動評定の因子分析の結果，行動に関する気がかりと情緒に関する気がかり，そして発達の遅れや障害の疑いに関する気がかりの3因子が抽出された。保育者の保育観の因子分析の結果，幼児との関わり経験，知識・保育観，保育者に求められるスキルの3因子が抽出された。これらの因子得点は施設や保育者の教育歴などで有意な差が見られた。「気になる子ども」の行動評定を目的変数，保育観と子どもの年齢や障害の診断の有無といった生物学的特徴および保育者の保育観，保育者の経験年数など保育者の要因を説明変数とした，ステップワイズ法による重回帰分析を実施した。重回帰分析は，施設ごとに保育者の属性が異なっていたことから異なる母集団であると判断し，施設ごとに実施した。その結果，施設ごとに投入された変数が異なっており，保育者の保育観は投入されなかった。投入されたのは，子どもの生物学的な変数や，保育者の研修や支援という変数だった。発達に関する気がかりでは，障害の有無が強く影響していた。私立認可保育所では，育児経験の有無が唯一投入された。

**〔考察〕** 保育者に「気になる」ととらえられる特徴は，行動・情緒・発達の3つの領域が明らかとなった。重回帰分析の結果，これらの変数には保育者の保育に対する考え方や保育観という要因が影響せず，子どもの障害の有無などの生物学的な特徴，保育者の支援体制や研修機会などの要因が「気になる」という判断に影響を与えることが示唆された。幼稚園と認可保育所で投入された変数に差異が見られたが，これは幼児教育と育児という保育の性質の違いが表れていると考えられた。従って，「気になる子ども」の保育や，「気になる子ども」を担当している保育者への支援を考える際に，施設ごとの保育の文脈を考慮した保育コンサルテーションが必要であることが考えられる。ところで，本研究で明らかになった「気になる」特徴は，客観的な子どもの特徴ではない。今後は，客観的な子どもの観察研究と，保育者の「気になる」特徴との関連について検討する必要がある。

**引用文献**

Bronfenbrenner, U. (2005). Ecological System Theory. In U. Bronfenbrenner (Ed.), *Making Human Being Human: Bioecological Perspectives on Human Development*. (pp. 106-173), Thousand Oaks: Sage Publications.

Sameroff A. J. (2000). Dialectical processes in developmental psychopathology. In A. J. Sameroff, M. Lewis & S. M. Miller (Eds.), *Handbook of Developmental Psychopathology Second Edition* (pp. 23-40). New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers.

## 5．幼児期の子どもをもつ母親の育児態度と成育歴の認識に関する検討
### －育児ストレスとの関連から－

栗林　春奈

本研究では育児支援を考えるにあたり，心理臨床の立場での子育て支援として，育児ストレスと＜育てる者＞の育ちのあり方を理解することと，現在の子育ての態度との関係を明らかにし，関係発達の立場から精神的な育児支援の必要性を考察した。

長野県内114名，札幌近郊61名，合計175名

の3歳児をもつ母親を対象に成育歴の認識と育児態度について，育児ストレスとの関連をアンケートにより調査を行なった。

育児ストレスにおいて，母親の年齢・父親の年齢・学歴・就労状況・子どもの人数・子どもと接している時間・家族の健康問題の有無は，本調査では関連がみられなかった。この背景には，ほとんどの母親が保育施設に子どもを預けるといった社会的支援を受けており，それぞれのニーズにあった支援を受けていることやアンケートに答えて返送できる，ある程度の余裕のある母親が対象となったことが考えられた。

PSI総得点・PSI下位因子と成育歴の認識・育児態度の関連より、母親にとって自分自身が個としての主体性をもって育てられたと認識することによって，子どもに対しての接し方も主体性のある個として捉えることにつながることや，それは子どもとの関係だけではなく，全ての対人関係の基礎となり得るものであり，人として育つにあたり重要な認識であることを示唆した。
また，ストレスを感じることで、話しかけをしないことや，体罰や干渉といったものを加えることとつながることが示唆された。

育児において社会的支援のあり方や現在の対人関係が大切であるということは，先行研究においても多く示唆されてきている。本研究の対象者では，ほとんどの母親が社会的支援・配偶者からの精神的支援を十分に受けている状況にあった。そのような状況の中での育児支援を考えたときに，母親の精神的な支援の必要性が考えられ，それは現在の対人関係だけではなく，その基礎となる母親が個として主体性を認められて育っていたかどうかもが重要となることが推察された。つまり，現在＜育てられる者＞が＜育てる者＞となるとき，また他者とどの様な関係を築いていくかの基礎に成り得る可能性や，育児ストレスが高まることで，育児態度が否定的となるため，育児ストレスを低めることを考えなくてはならない。

母親の育児に対する不安感やストレス要因を察知し，育児態度が肯定的になるよう，母親自身の育ちのあり方を受け止め成育歴を肯定的に捉えられるような精神的な支援を行なうことが必要である。また，母親だけが育児を担うのではなく，父親への育児教育の必要性も考慮する必要である。そして，現在の子どもが親になり子育てをすることを考慮し，現在の母親が子どもを個としての主体であると認識し育てていけるように支援することが，育児ストレスをうまく対処できるようになる＜育てる者＞を育てるという予防的な支援につながるのではないだろうか。

**引用文献**

鯨岡峻（2005）.「育てられる者」から「育てる者」へ：関係発達の視点から　ＮＨＫブックス，日本放送出版協会.

柏木恵子（2003）. 家族心理学　社会変動・発達・ジェンダーの視点　東京大学出版会.

## ６．統合失調症における病識欠如の原因仮説の検証

後藤　貴浩

自らの疾患を自覚できない病識の欠如という現象は，統合失調症において高頻度で見られる。この病識欠如は服薬・治療アドヒアランス，対人機能といった患者の予後に影響を及ぼす社会復帰阻害因子である。しかし，病識欠如という現象の機序が未だ不明確なために具体的な治療標的が定まらず，病識への介入はほとんど行われていない。近年，病識欠如の原因仮説として，遂行機能とコーピングという２つの因子の影響によって病識欠如が起こるという多要因モデルが提案されている。そこで，本研究は精神科リハビリテーションにおける病識への介入の基礎的研究として，この多要因仮説を検証し，具体的な多要因モデルの提案を行うことを目的とした。

研究参加者は統合失調症患者20名であった。参加者は予めSCID- Ⅰによって診断の信頼性が確認されており，またWAIS-Rによって精神遅滞が疑われる患者は除外された。その上で参加者に対して遂行機能評価尺度であるBADS，コーピング評価尺度であるTAC-24，病識評価尺度である